

月刊

地域保健

2
2014

●特集

子どもの自殺をどう防ぐか

●フロントランナー

菊池伊津子さん 《多久市 健康増進課 健康増進係 係長》

●ピープル

藤原 茂さん 《社会福祉法人 夢のみずうみ村 理事長》



社会福祉法人 夢のみずうみ村 理事長
藤原 茂さん

聞き手 白井美樹 (ライター)



被災地に子どもたちが集う「たまり場」を
「子ども夢ハウスおおつち」から始める復興支援

海に近づくとつれ、建物の姿が見えなくなり、草の茂った空き地が広がっていく。その中に、コンクリート家屋の基礎が見え隠れするのが痛々しい。岩手県大槌町は、東日本大震災で町の約半分を失った。交通が不便なこともあり、まだ復興がかなり遅れている状態だ。その大槌町に、昨年4月、「子ども夢ハウスおおつち」がオープンした。開設を手掛けたのは、全国にデイケアサービスセンターを展開する、社会福祉法人夢のみずうみ村理事長の藤原茂さん。そんな藤原さんに、この施設を造った思いを語っていただいた。

もともと作業療法士の藤原さんは、これまで高齢者介護の分野で異彩を放ってきた人だ。上げ膳据え膳の手厚い介護がかえって高齢者の生活力を奪うことに気づき、「バリアフリー」と

は逆の、段差があつたり手すりがないかたたりする「バリアアリー」の施設を運営。高齢者の生活力の回復に尽力してきた。

その藤原さんが、子どものための施設を造ろうと思ったきっかけは何だったのだろうか。

んに決意させた話とは、どんな内容だったのでしょうか。

藤原 家を失い、仮設住宅で暮らす子どもの中には、引きこもりや虐待などの問題があるだけでなく、自殺する子どももいるというのです。ある中学3年生の女の子は、仮設住宅で親戚と暮らしていましたが、両親の位牌を抱いて死んでいたそうです。

せっかく命を拾ったのに、それを捨てるなんてことを聞くのは耐えきれません。震災のショックを抱える子どもたちにとって、話を聞いて受け止めてくれたり、駆け込めたりする場所があれば、そんな悲しい出来事を食い止めることができるのではないかと思つたのが、一番の理由です。

―身内や友達などを突然亡くしたり家を失つたりなど、震災が子どもに与えたショックを考えると本当に心が痛み

藤原 すべてののきつかけは、納棺師の笹原留似子さん（いこ）と知り合ったことです。笹原さんは、震災後、おもかげ復元納棺師として、顔や体が壊れた遺体を元の姿に戻し、遺族にお返しするボランティアをしていました。

そんな笹原さんの活動は「NHKスペシャル」で報道されました。実は、私も以前に「NHKプロフェッショナル」という番組に出演したことがあり、番組関係の共通の知人が、私たちを会わせてくれたのです。以来、友人としていろいろな活動と一緒に言うようになり

ますね。

藤原 そうです。家を失くして、仮設住宅で暮らさなければならぬという環境も、心をむしばむ要因となつていきます。やはり、家の広さ、環境の広さというものは、子どもの発達に影響を与えると思うのです。

以前は、襖や階段、押し入れなどがあるゆったりした空間で暮らしてしました。それが、仮設の狭い空間に押し込められるようになると、子どもの優雅さや発想力など、精神的な発達に障害が出てくるでしょう。そこで、子どもハウスを設けることで、震災前の家の感覚を呼び戻させてあげたいという思いがあつたのです。

PROFILE

●ふじわら・しげる●

1948年山口県萩市生まれ。作業療法士、社会福祉法人夢のみずうみ村理事長、NPO法人夢の湖舎理事長、株式会社夢のみずうみ社代表取締役、琉球リハビリテーション学院長。慶應義塾大学入学直後から児童養護施設の住み込み児童指導員となる。33歳のとき東京都立府中リハビリテーション専門学校作業療法学科卒業。高齢者リハビリテーション施設勤務などをへて、2000年、NPO法人夢の湖舎を設立。

なりました。

―笹原さんから震災後の話をいろいろと聞くうちに、私の頭から離れなくなつたのが被災地の子どもたちの問題だったのです。

被災地の子どもたちが 駆け込める場所をつくる

―子ども夢ハウスを建てようと藤原さ



募金活動をして 大槌町にハウスを設営

―ところで、数多くの被災地の中で、大槌町に子どもハウスを建てることにしたのは、どうしてなのでしょう。

藤原 大槌町は、笹原さんがもつともかわつてきた町で、その話を聞いていたことが大きいですね。ご存じのように、大槌町は津波で町長も町職員幹

部もいなくなってしまう、釜石や陸前高田などに比べてマスコミ報道も多くありません。その分復興が遅れており、「やるんだったら、大槌町」と思ったわけです。綿密な計画や、特に強い熱意があったわけではありません。ただ、目の前に弱い人や困っている人がいたら放っておけない……そういう中で、後先考えずにかかわっていくのが私流なのです。

—具体的に、どのような経緯で子ども夢ハウスを造ったのですか。

藤原 第一期建設運営資金として、1億円の寄付金の募集活動を始めました。現況では、2000万円が集まっていますが、これまでに集まった資金で、まずは子どものためのハウスを造ることにしたわけです。

—といっても、土地を買って家を建て



「子ども夢ハウスおおつち」の玄関口

るのは難しい。そこで、借家を探したのですが、これもたいへんでした。とにかく空いている家が見つかったので。幸い、7LDKの物件を見つけたのですが、月17万円とべらぼうに高かった。でも、それが最後の1つだったの



右上の赤い建物が「子ども夢ハウスおおつち」。数段下がった宅地から下は津波で海まで更地になっていた

で、迷わず借りることにしました。それがこの子ども夢ハウスです。

—子ども夢ハウスではどのような活動をされているのですか。一種の学童保育のようなものなのでしょうか。

藤原 うーん、それとはちよつと異なりますね。開所時間も決まっていなくて、子どもたちは、来たいときに来て、帰りたいときに帰ります。ここに集まるのは、子どもだけでなく、親や近所の住民、高齢者も出入り自由です。キッチンの冷蔵庫も勝手に開けて、勝手に取って食べていいことになっています。

もちろん、誕生会や料理大会、Tシャツ作り、影絵活動など、いろんなイベントは次々に催しています。常駐する職員が2人いますが、誰が指導者で、誰がサービスを受ける人といった線引きはありません。いわば「たまり場」

—という感じですか。

子どもたちと一緒に「遊びの場」の公園造り

—昨年4月に開所されて、子どもたちの変化というか、成果はありましたか。

藤原 子どもたちが道草できる場所ができたという点では、意義は大きいと思いますね。

—この坂の上の旧安渡小のグラウンドには、仮設住宅がびっしり建っていますが、そこに住んでいる子どもたちの多くは、今はスクールバスで離れた場所の小学校に通っています。そうすると、学校の行き帰りに遊ぶ場所がどこにもなかったのです。でも、今はハウスに寄れば遊ぶことができます。それから、昨年の10月には、夢ハウスの近くの駐車場スペースを借り、ボランティアの方々の力を結集して、「すりきずこうえん」を造りました。子ども

—そういうえば、来るときに公園を拝見しましたが、子どもたちが汗を流しながら丸太をギコギコと切っていましたね。

藤原 あれは、公園に置く自分の椅子を作っていたのです。太い丸太をのぎりで分断するのは、小さな子どもにはとてもたいへんな作業です。でも、最後までやることで、「継続力」を養うことができるので、みんなにやってもらっています。ふうふう文句を言い

ながら、丸太を切っています。やり遂げたときの達成感を味わってくれているようです。

この子どもたちは、震災の影響なのかよく分かりませんが、「触覚防衛」という感覚障害があるように見受けられます。ベタベタ、ガラガラ、ヌルヌルなどの手触りに過敏に反応して嫌がるのです。でも、公園を昨年の7月から一緒に造ったり、設置された遊具に触れて遊ぶようになったりするうちに、そうした障害が少しずつなくなり、気持ちも落ち着いてきていくように思います。

やはり、震災のショックは、そういう障害にもあらわれてくるのですね。

藤原 この子どもたちを見てみると、もともと漁師町で漁師の気

性を受けついでいるせいなのか、震災のダメージのせいなのか分からないのですが、当初は性格に荒々しさが目立ちました。

そりゃ、そうですね。すさまじい震災を体験しているのですから……。当日の津波で家が流されていくショックと、後日の惨状を見たショックが重なりあっている。それだけの厳しい体験をしているのだから、普通の穏やかな人と人とのぬくもり感覚をどこか失っている。

そういう子どもたちに、少しでもゆったりと落ち着いて、人と交流できる場をつくってあげるのが、私たちの役目ではないかと思っています。

子ども夢ハウスが 心の原風景になるように

「これから、子ども夢ハウスを基盤に、何かやっていきたい」という構想はおありですか。

「子ども夢ハウスおおつち」に集う



きょうは誕生日パーティー。ごちそうは子どもたちの手作りのケーキやピザ



学校帰りの子どもたちが大勢押し掛けてきていた



明るくカラフルな室内の調度品



被災犬も子どもたちと一緒にのびやかにハウスで暮らす

藤原 決定しているところでは、今年の3月に、すりきずこうえんで「第1回全日本雪合戦サッカー」を開催します。ここは海辺の町なので、雪は降らないのですが、西和賀町という豪雪地帯から雪を持ってきてやることになっています。

実は、私は23、24歳のころ、東京都立川市の養護施設で指導員をしていました。そのときに、子どもたちと一緒に雪合戦サッカーをやったことがあるのですが、これが実に楽しかったのです。現在、琉球リハビリテーション学院の院長もやっているのですが、沖縄の人にも来ないかと誘っているんですよ。雪を知らない子どもたちに、雪で遊ぶ楽しさを知ってもらいたいですね。

「ところで、いずれ震災を知らない子どもたちも生まれ育つてくると思いますが、子ども夢ハウスは将来、どのよ

うな形になっていくのでしょうか。

藤原 子ども夢ハウスは、ずっと使う施設ではないと考えています。まもなく、道路が整備され、福祉住宅などの建設が進めば、子どもたちは仮設住宅を出て、この場所から離れていくでしょう。そう考えると、わずかな時間の中で、たくさんの方をここで経験し、地域に溶け込みかけになってくれればいいわけで……。

通過していく施設だけど、原風景として子どもたちの中に残ればいいなと思っています。10年後、20年後、子どもたちの結婚式などに、家族のごとく、職員や私が呼ばれたら、こんなうれしいことはありません。

大槌町の人々が働ける 場所づくりも計画

「子ども夢ハウスの役割が終わったら、どうされますか。」

「すりきずこうえん」で遊ぶ



▲丸太切りは子どもにとってはかなりの重労働。ハウスの職員が見守りつつ叱咤激励



◀遊び心にあふれた手作りの看板には「すりきずなんてへっちゃらさ」の文字が



▲切った丸太には名前を書いて自分用の椅子にする



▲公園には子どもたちの元気な声が響いていた

藤原 1億円募金の第2期募集においては、ここ大槌町の人たちが働ける場所をつくる予定です。

震災のせいで、大槌町は産業が消えて、仮設住宅に引きこもりになっている高齢者が多いのです。そういう人たちが活躍できる場として、1つ目は「魚の薫製作り」をしたい。われわれは、薫製作りのノウハウを持っているので、薫製作りのグッズを販売したり、実際に薫製を売ったりする事業を始めたいのです。

それから、2つ目は「スープ屋」です。私が理事長を務めるNPO法人は、山口県でスープ配食サービスの事業を営んでいます。それを、ここ大槌町でもやろうと考えているのです。高齢者の方々が、一軒一軒回りながら、日銭を稼げるような、そんなシステムをつくりたいですね。

——もともと「夢のみずうみ村」は、デ



「すりきずこうえん」の彼方に見えるのは大槌湾

イケアサービスを主体とされていますよね。そうした施設を造ることは考えていますか。

藤原 そのあたりもいろいろと考えて

はいるのですが、なかなか難しいところがあるのです。会社として成り立たせるか、介護保険施設にするか……。ただ、防御的な声も多いので、介護保険制度を使用した施設は、当面はやらないでしょうね。

とりあえず、今、すりきずこうえんの脇に高齢者のたまり場となるようなあずまやを造っています。その小屋は、仮設住宅にこもってお酒ばかり飲んでいたり、80歳の腕のいい棟りようを引きずり出して造っているんですよ（笑）。完成したら、高齢者がそこに集まり、お茶でも飲んで、元気になれる場として活用してほしいのです。今後のビジョンとして、高齢者が「集まれるところ」「小銭を稼げるところ」——それを大槌町に造っていくと思います。それから、将来的には、障害児訓練室、児童デイサービス、学習支援塾などもやるつもりです。「私の福祉は、子どもに始まり、子どもに終わる」と考え

ていますので。

—これまでのデイケアサービス事業とは趣の異なる事業を展開していくお考えなのですね。

藤原 とはいっても、私は現在320人以上の職員を抱えていますから、簡単にケツをまくるわけにはいきません。まずは、今やっている事業をきちんと安定させて、運営をまかせられる職員を育てたり、第三者に委託したりするつもりです。そして、向こう5年で、ここの大槌町の事業や子ども福祉に専念できるような体制をつくり上げていきたいと思っています。

大槌町を自分の ついのすみかにする

—今は、全国を飛び回る感じで、ものすごく多忙な生活を送っていらっしゃると思いますが。

藤原 そうですね、本拠は東京都世田谷区に職員と借りているマンションなのですが、先月はそこに泊まったのは5日くらいかな。あとは、大槌町に5泊、沖繩に3泊、山口の実家に1泊、そして各地を講演で回るといって感じでした。でも、いずれは、大槌町に住むつもりです。

初めは、「何とかしていきたいね」「僕たちでできることをしよう」と、深い考えもなく大槌町のために募金活動を始めましたが、今は、私自身のついのすみかにしようと決めているのです。

—そういえば、募金による事業計画の第5期に「宅老所」「エルダー旅籠^{はたご}」ということが掲げられていましたね。

藤原 これは、いわば介護付きホテルです。介護が必要な人が、付添者とともに宿泊できる、長期滞在可能な宿舎建設するのが私の夢です。そして、そ

の隣に私が住む職員住宅を造って、そこで一生を終われたらいいな。現在は65歳ですから、70歳で大槌町に住むようになって、75歳で生涯を終える……自分の中ではそう考えているんですけれどね（笑）。

全国を駆け回って、大槌町に戻ってくると、子どもたちから「おかえり〜」という声が飛び交うそう。ただし、口の悪い子どもたちは、藤原さんを「クソおやじ」「クソじい」などと呼び、今では「クッソー」というあだ名がついているとか。そんなエピソードも、藤原さんと大槌町の子どもとの間に、しっかりと絆と信頼感が築かれている証だろう。

夢のみずうみ村

<http://www.yumenomizuumi.com/index.html>